

言が肉となった

1 初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。2 この言は、初めに神と共にあった。3 万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。4 言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。5 光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。

6 神から遣わされた一人の人がいた。その名はヨハネである。7 彼は証しをするために来た。光について証しをするため、また、すべての人が彼によって信じるようになるためである。8 彼は光ではなく、光について証しをするために来た。9 その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである。10 言は世にあった。世は言によって成ったが、世は言を認めなかった。11 言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった。12 しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。13 この人々は、血によってではなく、肉の欲によってではなく、人の欲によってでもなく、神によって生まれたのである。

14 言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。15 ヨハネは、この方について証しをし、声を張り上げて言った。「『わたしの後から来られる方は、わたしより優れている。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この方のことである。」16 わたしたちは皆、この方の満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上に、更に恵みを受けた。17 律法はモーセを通して与えられたが、恵みと真理はイエス・キリストを通して現れたからである。18 いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである。

聖書 新共同訳(C) 日本聖書協会 Japan Bible Society, Tokyo 1987, 1988

今日は1章9節の言葉に焦点を当てて考えてみたいと思います。

「**真の光があった。すべての人間を照らすものである。それが世に来た。**」(田川健三訳)と翻訳されている本もありました。6~8節はバプテスマのヨハネに関する説明で、挿入された可能性もあると言われます。5節に続いて9節を読むと、詩のような短文で、「光」について語っています。

命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。

暗闇は光を理解しなかった。

真の光があった。すべての人間を照らすものである。

それが世に来た。

9節は3つの内容があります。ヨハネによる福音書は、イエス・キリストを「まことの光で」と証言します。「言」とも記されたイエスは、命であり、その栄光をご自身のいのちにおいて現わされました。人びとが神の方へと向き直ることができるように、暗闇の世界の中で輝いているということです。自ら人となられたイエスこそが、人間の命というものが真に価値あるものであることを現わしておられます。

次に、光としてこの「**世に来られ**」たと言うことで、神がわたしたち人間に光を与えようとしていることも伝えます。神は光を当てて人に注目し、見出し、呼び出そうとされているのです。ヨハネ福音書ではイエスの「**わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ。**」(8:12)という言葉を書いています。イエスが道しるべとなられてわたしたちを導かれます。

最後に、光は、自らが輝くだけでなく、「**すべての人を照らす**」とあります。イエスに照らされた者は、自分自身の姿もあらわにされるのです。また、隣人が見えるようになるのです。光というのは、神ご自身の存在をあらわされるものであり、そして私自身のことを明らかにされるものであり、そして隣人のいるこの世界をも見るようになるようにされる。そのような働きかけをされるのです。

「**わたしは世の光である**」というイエスの言葉の前に「**姦通の女**」と題されるエピソードがあります。人びとは姦通の現場から女性だけを

捕らえて公衆の面前に晒し、イエスのもとに連行しました。しかもそれはイエスの反応を試すためのスケープゴート(犠牲)でした。裸のままだったかもしれません。人びとは性的な理由でスポットを当てられた女性を蔑み、責めました。イエスだけは地面に何かを書いてます。その姿勢は彼女をさらす眼差しに加わらなかったとも言えます。そしてイエスの「**あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい。**」という言葉が、そこにいたすべての者心の中奥まで照らします。人びとは皆その場を去りました。イエスは女性に言われました。「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない。」イエスという光は、晒しと断罪の光ではなく、人の尊厳を回復させ、人が生きる価値と道を指し示すものです。

今日12月1日は「世界エイズデー」です。1988年、世界レベルでの HIV/AIDS のまん延防止と患者・感染者に対する差別・偏見の解消を目的に、WHO(世界保健機関)が制定しました。未知の病は人びとに恐れや嫌悪、暗闇と分断をもたらしました。当時のアメリカのキリスト教会では感染者の葬儀を拒否した事例も多くあったそうです。性に対する嫌悪と断罪でした。今日でも、性感染症への嫌悪(フォビア)が、感染者に身体的のみならず、宗教的、社会的な痛みを与えるような事例が続いています。連帯と追悼を表すレッドリボンは今なお、結ばれ続けなければなりません。感染症や依存症のケアにおける近年の取り組みで、「**ハームリダクション**」(harm reduction)という活動が注目されています。感染症や依存症の患者たちを断罪し、社会から消し去るのではなく、課題もありながらも、包摂して、人として生きていくことを励ます取り組みです。

神がこの世に送られたイエス・キリストという光は、人を晒し断罪するためではありませんでした。その人を照らし、あなたは生きています、命を見出させ、神の許へと立ち帰らせる愛の招きの光でした。アドヴェントの期間、わたしたちもイエス・キリストの光に照らされて、自身の、そして隣人のいのちを見出す心の備えをしたいと思います。

教会の約束

わたしたちは、神の恵みによってイエス・キリストは主であると信じ、告白してバプテスマを受け、この教会の一員に加えられましたので、聖霊の助けによってこの約束をいたします。

わたしたちは、この教会が人によってではなく神によってできたものと信じ、主の日の礼拝、教会の定めた集会に参加し、教会がきよくなるよう、一致するよう、栄えるように祈ります。またバプテスマと聖餐の二つの礼典、そして聖書の教えと教会の定めた秩序とを守ります。

わたしたちは、この教会を支え、また世界に福音を伝え、神のみ心が広く行われるために進んで必要なものをささげます。

わたしたちは、主にある兄弟姉妹として愛しあい、互いの喜びと悲しみを共にいたします。

わたしたちは、ひとりで祈ることや家族と共に祈る生活を大切にし、わたしたちが預かった子どもたちを神に喜ばれるものになるように教え育て、またまことの心と正しい行いとすべての人を愛することによって、人びとを救い主に導くよう心掛け、主と再び会う時まで、この約束を固く守ります。

わたしたちは、どこにあってもこの約束の精神と神の言葉の真理が実行される教会に加わることを約束いたします。

日本バプテスト同盟 関東学院教会

「教会の約束」について

「教会の約束」と言われるこの言葉は、Church Covenant と言い、本来は教会契約と訳されるべきものです。

バプテスト教会の一番の特徴はこの「契約」を結ぶということにあると言われます。17世紀にイギリスに発足した初期のバプテスト教会は、ただ信仰を告白しバプテスマを受けた信仰者の集まりとしてではなく、「契約共同体」として教会形成がなされました。

契約とは、第一に神と教会員の、第二に教会員相互に交わされる二重の構造を持ちます。教会の一員になるとは、神との、そして信徒相互の契約のパートナーになるのだという自覚と責任をもって集まっていたのでした。

一つの教会が各自で教会の契約を結ぶゆえに、各個教会が尊重されるのです。そういう意味で「教会の約束」はバプテスト教会の本質的で重要な意味を持っています。

本来ならば関東学院教会固有の「教会契約」があるのが望ましいですが、教会では、日本バプテスト同盟に連なる教会が多く採用してきた約束の言葉を採用してきていました。この「教会の約束」の本文は2009年改訂新版の日本バプテスト同盟「信徒の手引き」にある口語文の言葉です。かつて関東学院教会で唱えられていた文章は文語体でしたが、このたび聖餐式の中で唱和することを再開するにあたり、同内容の口語文を採用いたします。

聖書では、神はイスラエルと契約を結ばれた方であると証言しています。そしてイエスの十字架と復活は、神とわたしたちの新しい契約です。神は罪ある人を愛し、赦し、救い出して新たに生かしてくださいます。

約束してくださる神に支えられ促されて、わたしたちも神と、そして人々と、愛と赦しの関係に生きるというこの教会の約束を心から唱和し、その道に歩みたいと心から願います。